

2017年7月20日 2時間目だより



「名前、それは燃える生命（いのち）。ひとつの地球にひとりずつひとつ」と歌ったのはゴダイゴ。1979年の国際児童年 International Year of The Child の協賛歌である。

個体にそれぞれ名前があるのは、おそらく人だけだろう。もし名前がなかったら、社会はようになっていただろう。自己という意識はどうなるだろう。と、興味の尽きない名前。

受講生の名前はみなユニークだ。叶夢。なぜか「とむ」と読まれることが多いという。辞書を引いても、「叶」に「と」という読みは見当たらない。音だけ聞くと、Tom が頭に浮かぶ。英語圏では「トム」にする、というのもありかも。強は「ごう」と読む。強さん曰く、この読みは Go を想起するので気に入っているという。字面からは「強さ」がきわだつが、音からは積極的な印象がする。同じ名前なのに、字と読みとで異なる印象が生まれる。健吾さんはきょうだいを前提につけられている。同い年の姉は康葉さん。二人の名前の頭文字を並べると、「健康」となる。語源は「健体康心」。健（すこ）やかな身体（健体）と、康（やす）らかな心（康心）を意味する熟語だ。出典は中国古代の書「易経」。

萌さんは、みんなの名前の由来を聞いていると、それぞれの人の両親の姿も見えて来て「つながりを感じた」と書く。命名はいわばリレーのバトンタッチでもある。菜々さんの苗字はめずらしい名前だ。「同姓同名の人がいないので、自分らしくしっかり生きています」。結婚を機に苗字がありふれたものになると、この思いも変わるのだろうか？ 麻耶さんは、「自分の名前は一生付き合っていくものだから大切にしたい」と書いてきた。名前のほうもそう思っているかもしれない。「大切にすよ、麻耶さんを」と。

真季歩さんから「キラキラネームが流行りだしたのにはどのような背景があるのでしょうか」との質問が寄せられた。多様な背景については、『キラキラネームの大研究』とか、『子供の名前が危ない』『名づけの世相史』あたりでも、一定の分析がなされている。私としては、「世界に一つだけの花」に象徴される「個性」重視、子供観の変化（生まれる子供から生む子供へ）があるのかなと考えている。

綾乃さんは名前の読み方に関心をもったようだ。綾乃には「あやの」しかないと思っているが、ほかの読み方もありうるのだろうか、と。同じく「乃」を含むひな乃さんは、ひらがなの名前のため、読みには関心はなく、自分に子供ができれば「キラキラネームにならない名前にしたいです」。大宙さんは、「自分の名前は読みにくいので、将来子供には皆に呼ばれやすい名前にしてあげようと思っています」。読みが「だいちゅう」だったら、そう思わないのでしょうか。大宙（おおぞら）は、大空よりも広大な感じがする、確かに。

2017.7.21

川浦康至